

【研究協議題】 「社会に開かれた教育課程」の編成・実施

～業務改善の視点も踏まえたカリキュラム・マネジメントの推進～

【解説】

下松市では、全小中学校がコミュニティ・スクール（以下CS）に指定されてから5年目を迎えている。県内で最も遅いCS指定ではあったが、その分、各校にCSコーディネーターが配置されたり、十分な予算が配当されたりと市のバックアップもあり、取組が充実しつつある。

そうした中、特に中学校区での地域連携教育を進めるため、「めざす子ども像」を共有して、関係小学校との“縦”の連携と、CSとして家庭・地域との“横”の連携を強化しながら、9年間を見通した「社会に開かれた教育課程」の編成が重要と考える。

ただし、本市中学校長会としては、指導要領上の教育課程に限らず、部活動やPTA、関係団体等との連携や在り方等を含めた広い意味での「カリキュラム・マネジメント」に取り組み、課題等の把握とともに、改善に向けた積極的な取組を進めたい。

【研究の視点】

- 校区内小学校との連携のもと、9年間を見通した実際的かつ具体的な教育課程の編成
- CSの機能を活用して「めざす子ども像」育成のための具体的取組の実施
- 部活動等を含め、教育課程全般にわたる一体的な業務改善の工夫
- 小中で共通項目を設定した「学校評価」のための取組推進

【研究協議題】 「主体的・対話的で深い学び」の実現

～校長のカリキュラム・マネジメントの進めかた～

【解説】

新しい時代を生きていく子どもたちに必要な資質・能力を育成するにあたり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善を進めていくことは、学習指導における最重要課題である。

美祢市校長会としては、「『主体的・対話的で深い学び』とカリキュラム・マネジメントとは一体的に進めていくことが重要である」（平成28年12月21日中教審答申）という点に注目し、研究テーマを設定した。

1年次は、「校長のALカリキュラム・マネジメント」として、6つのポイントを設定し、研究を進めた。成果としては、「ALに関する基礎的な知識を習得できたこと」「AL実現の意義や目的を共通理解できたこと」「市内中学校教職員の意識や現状把握ができたこと」「美祢市校長会を拠点としたALネットワークが形成できたこと」などが挙げられる。

これらの成果を踏まえ、2年次は「校長は実際にどう動くか」について、具体的・実践的な提案をしていきたいと考えている。

【研究の視点】

○AL実現に向け、校長は、カリキュラム・マネジメントの視点で何をどう進めていくか。

【研究協議題】 よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実
～道德科の授業力の向上と小中連携について～

【解説】

道德教育の充実にあたっては、「考え議論する」道德科の授業力向上をはじめ、指導体制の見直しを図る等、学校全体で組織的・計画的に推進していくこと、さらには家庭や地域との連携、小学校との連携をふまえて推進していくことが求められている。

そこで研究1年目は、市内各校で全教員による授業実践や授業研究を進めるとともに、市内の学校での共通取組として、教科書のすべての資料のデザインシートの作成を進めた。デザインシートの作成においては、授業の基本スタイルを示した作成のポイントをつくり道德科への理解を図ったり、作成を通して授業研究につなげたりした。また、市校長会から市中教研道德部会へ働きかけ、人材活用の視点に立って、部会の道德教育推進教師の主体性を促しながらこうした取組を進めた。

2年目となる今年度は、1年目に作成し共有したデザインシートを授業力向上のために積極的、効果的に活用していくことが必要である。また、本市では中学校区ごとに長門みずゞ学園として、小中一貫、小中連携による教育を推進したり、郷土の童謡詩人金子みずゞさんの優しいまなざしや感性を生かした心の教育を進めたりしている。こうした市の方針等をふまえて、小中連携についてさらなる具体化に取り組みたい。

【研究の視点】

- 道德科の授業力の向上の取組
- 小中連携の取組

【研究協議題】 健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

【解説】

新中学校学習指導要領の総則第1の2(3)では、「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること」と示されており、平成31年度から新しくなった本研究協議題そのものである。また、「山口県教育推進の手引き」などの関連資料では、「①社会環境の急激な変化に伴う、児童生徒の生活習慣の乱れやメンタルヘルスに関する問題、アレルギー疾患等、②自然災害、登下校中の事件・事故やSNSの利用をめぐるトラブル等、③筋力、柔軟性の不足、運動習慣の2極化等」の課題が指摘されており、健康教育の内容は多岐にわたる。

下関市中学校長会では、令和元年度（研究1年次）に、「生徒による主体的な意思決定」をキーワードにして、「連携」の視点を踏まえながら、「健康で安全な生活」と「豊かなスポーツライフ」に結びつく取組を進めた。その結果、「連携」については、「校内」と「校外」が密接に関係するものが多かった。また、「生徒による主体的な意思決定」については、「校長の働きかけとかかわり」を具体化することが難しい面があった。そのため、今年度は2つの視点に整理して、「生徒による主体的な意思決定」も可能な限り取り入れながら課題解決に迫る取組を目指していきたい。

【研究の視点】

- 健康で安全な生活の実現を目指す連携の取組
- 豊かなスポーツライフの実現を目指す連携の取組

【研究協議題】 社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

～生徒のキャリア発達を支えるカリキュラム・マネジメントの創造～

【解説】

Society 5.0の実現に向けて、産業構造や就業構造の急激な変化が生じている現状において、生徒が社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、キャリア教育の充実を図ることが学校に求められている。

研究1年目は、「PDCAでみるキャリア教育推進状況チェックシート」を活用して各校の現状を確認したり、各校の実践をもとに体験活動をキャリア教育の視点で捉え直したりすることで、校長としてキャリア教育の充実を図る上での課題を明らかにした。

2年目となる今年度は、1年目の成果と課題をふまえ、キャリア教育のキーワードである「つなぐ」という視点で課題を捉え直し、研究を進めていくこととした。

【研究の視点】

○キャリア教育と教職員をつなぐ

基盤となる資質・能力を教職員に意識させるためにはどうすればよいか。

○校内の学び、学校と地域をつなぐ

教育活動をキャリア教育の視点で捉え直し、キャリア教育の充実のため、どのようにマネジメントすればよいか。

○小・中・高の学びと育ちをつなぐ

キャリア・パスポートを通して、校種間連携を深めるためにはどうすればよいか。

【研究協議題】 自他を敬愛し、他者と協働しながら、自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

【解説】

岩国市・和木町校長会では、上記のテーマを達成するために下記の校長の具体的な役割を設定して、実践を行ってきた。

- ① 生徒指導に対する概念が、これ以上「固定化」したり「矮小化」したりすることがないように、啓発、指導、助言、実践を続けていく。
- ② 学校に大きな流れを創り出し、臨床的なアプローチとの並立をめざす。
- ③ 教育活動を立案し、実施する際、「自治」「自立」「自律」を意識するよう教職員に投げかける。
- ④ 教員「個人」を育てることと並行して「組織」を育てていく。
- ⑤ 生徒、保護者、地域住民との距離を適切に保ち、校長自身に情報が入りやすくなるよう心掛ける。
- ⑥ 校長自らが責任の所在を明確にしなが、一つ一つの問題に対して適切に対応する。
- ⑦ ベテラン教員の技術が、若手に順調に引き継がれていくよう、環境を整える。

さらに、これらの取組の成果を検証するため、「Ⅰ 人材育成（職員会議）」「Ⅱ 人材育成（校内研修）」「Ⅲ CS・地域協育ネット」「Ⅳ 小中高一貫教育」の4つの視点を設定し、①～⑨の取組の具体や成果と課題を共有、整理しながら研究を深めていった。

【研究の視点】

本年度は、さらに次のような視点を設定しテーマを追究して、

- 「新生徒会執行部を育成する」という視座から、「自己指導能力」の概念と正面から向き合う。
- 「学校が直面している課題を解決していく」流れの中に、「自己指導能力」の育成を位置付けることで、より現実に即した取組とする。

【研究協議題】 多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

～学校・地域の特性を生かした人材育成～

【解説】

今日、少子高齢化の進行、グローバル化や高度情報化の進展や知識基盤社会の到来などの社会の急激な変化に伴い、家庭や地域社会の変容、個人のライフスタイルの多様化など子どもたちを取り巻く環境は急速に変化している。このような中、中学校教育においてはいじめや自殺の未然防止、規範意識や社会性の育成、学力の向上、不登校の解消等、多様化する諸課題への対応が迫られている。

しかし、一方では大量退職、大量採用の影響により教職員の不均衡な年齢構成が顕著になっており、経験豊かなベテランの知識や技能を効率的にそして確実に若手に継承し、学校を取り巻く諸課題に迅速に対応するため教員の資質能力の向上を図ることが喫緊の課題となっている。

そこで、萩・阿武中学校長会では、この地域でこれまで取り組んでいる多様な形態（一貫・併設・隣接・分離）の小中連携教育やコミュニティ・スクール、また、小規模校（離島を含む）を多く有する地域の特性を生かした人材育成の在り方について研究を進めることにした。今年度は、地域の各中学校における人材育成上の課題を整理・分析し、若手（経験年数0～5年）の人材育成に絞って研究を深めていきたい。

【研究の視点】

- 小中連携、CSの機能や組織を生かした人材育成の取組と校長の働きかけ
- 小規模校における人材育成上の課題と解決のための校長の働きかけ
- 「山口県教員育成指標」の効果的活用に向けた校長の働きかけ

【研究協議題】 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

【解説】

学校には、これまでも新たな課題に応じて、司書教諭、栄養教諭等の新しい職が導入されてきた。近年は、ますます複雑化・多様化する教育課題に対応するため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、部活動指導員等の教員以外の専門スタッフが導入されつつある。そのため、これからは教職員間のより一層の組織的対応を強化することはもちろん、すべてを教職員が担う自己完結型の運営を廃し、これら専門スタッフとの協働を推し進め、学校内の多様な人材がそれぞれの専門性を生かして能力を発揮するチームとしての学校を実現していくことが求められる。また、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）等を活用するなど、チームとしての学校と地域の連携体制を整備していくことで、学校を核とした地域づくりを推進し、社会総がかりで教育を進めていくことも求められる。その結果として、教員が担うべき業務の精選・明確化などを通じ、教員の働き方改革につなげていくことも必要である。

こうした「チーム学校」の実現のため、校長は、これまでの教職員の管理を主とするマネジメントから脱却し、多様な人材を含めた学校組織全体の効果的な運営のためのマネジメントを進めていく必要がある。

【研究の視点】

- 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方
- チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方
- 「チーム学校」の実現と教員の働き方改革の在り方